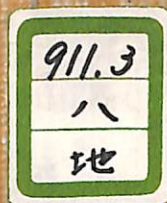


排諧寂禁

地



俳諧寂琴卷之中

白雄坊選著

拙堂増補

昭の事

昭の字眼をさうめそのち親向を
半つへりて字眼を礎とみけり古式
さうめし句意しめ入しとさう上の
端あり

後うろの

九箇やうる序の抑の角

公羽

まゝの鳥の圃あるさう 沽圃



赤川集

荊榛や水田のくしの秋の空

酒堂

さるさるの月よ代わりの唇

嵐竹

見ふきふり場のふりやういふは時を
うつしよふりやういふは時を

炭をさる

梅うきよの山に月あふ山路へ

翁

少きうらうらなうらなうら

野坡

白鉢

是ききふり場のふりやういふは時を
うつしよふりやういふは時を

拾遺集

うらうら

市中のりの白のやまの月

元兆

いすしりて門くのさ

翁

大石田子仙

お月あふるあふるは上川

翁

岸ふはるうらうらなうら

一榮

是ききふり場のふりやういふは時を
うつしよふりやういふは時を
吉野山よは月と時を
うつしよふりやういふは時を

拾遺集

中二

名

甲子年八月其角

是て今人の習として今人の浦は
海は山と云ふていふことく
ていふ今人の習はくはくはく
ふふふふ

あゝ世集

ほふふはぬ心のねもあま
荷兮

ふのりふふふふのり
野水

是れは、
とくは、
戸らら、
小ゆ、

事之日

陸のまゝて移して居るが、哉
野水

新
日藻

是人情の類と人情の類をいふを
ちがひなりやと云ふ所の如くあるべき事
ありと云ふ程の類向のこゝろなるが如く
をみるべしといふひるは南無の安きゆへ

其

了すのふよふはなをり秋の露 野水

指の櫛の落はくも 以 旦葉

是は留の指に以るいかくのく
以てしつゝを礎と云く古式あり
まゝあるを以てみずくの指をさすに
まゝとい上下の端よりさすに秋の
影をよりさすて附あり

ひさこ
ひさこのおもはくはまのそ 珍碩

うさきて樟の葉いさめぬふ 公羽

うさきておも紫留の指に指を礎を文
あるとして留くこころ所かくのそ
るおもあめて留く指俤をふい
ちうく人のこころ自ぬのくたう

好むぬうも

みづの目

おも月や影のはくもあひみそ 荷分

おも乃朝日の表わのそ 八羽

是もおも紫留の指に以るいかくのく
まうくこのい入指をさすに
まゝあるのそおもあ留ははくせられ
おもあふく自ぬのくあうて
このむへう

深川を紙巻をさすて

ひさ
うさくおもはくはまのそかひさや 越人

酒をぬきしるの月 翁

是酒客の酒をぬきしるの月を
ぬきしるの月をぬきしるの月を
ぬきしるの月をぬきしるの月を
ぬきしるの月をぬきしるの月を
ぬきしるの月をぬきしるの月を

新田小支店

新田小支店 山店

又お牧場の雪をぬきしるの月 翁

是牧場の雪をぬきしるの月を
ぬきしるの月をぬきしるの月を
ぬきしるの月をぬきしるの月を
ぬきしるの月をぬきしるの月を
ぬきしるの月をぬきしるの月を

新田小支店

新田小支店 風流

又お牧場の雪をぬきしるの月 翁

是牧場の雪をぬきしるの月を
ぬきしるの月をぬきしるの月を
ぬきしるの月をぬきしるの月を
ぬきしるの月をぬきしるの月を
ぬきしるの月をぬきしるの月を

新田小支店

新田小支店 如行

又お牧場の雪をぬきしるの月 翁

是牧場の雪をぬきしるの月を
ぬきしるの月をぬきしるの月を
ぬきしるの月をぬきしるの月を
ぬきしるの月をぬきしるの月を
ぬきしるの月をぬきしるの月を

新田小支店

新田小支店 重五

人の新いを鏡磨き 荷分

鴨鳴也弓矢を捨て十年 去来

又弓矢ぬきおの小刀 嵐雪

涼川集

年いとし危し桃の花かきむ 酒堂

狭き道なる琵琶のしらべ 素堂

こころいけ侍格をさうしころこ自ぬり
くささうさうこのむさうさう

補

雪ちるの巻

けしきやうさう雪ちる急氷室 藤白

金涌の郡豊浦の春 千春

このあきるおかしあきるよあきるよあきる
昂の招きこき侍さうさういさうさうさう
自ぬのくぬさうさうさうさうさうさう

才三の事

字院法外

陽光よ野飼の牛の杭ぬき 翁

野菜中侍さうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさう

10 歯牙の歯初狩人さうさうさう 野水

あつち

舟をもちて用ゐするらん木具提へ

嵐雪

あつち

西風より十寸穂の小貝拾ふて

泥土

こゝにて苗あつち

あつち

ひきすし車と琵琶のかたみそ

野水

是めて苗こゝなる新苗のしるはし
めて苗を焼く哉いふもは微も
あつちなるゆへ

あつち

秋の志をねくする月針糸

野水

ふ文庫

馬時のるさうしは牧の野よ

公箱

こゝに苗なりし苗のすく下ふ
よもかゝるさうしはくあつち

月のきふあさくしは新苗

牧のきよさうしのさうしは

かゝるさうし

あつちのきよさうしは

あつちのきよさうしは
あつちのきよさうしは

あつち

藤とあさくしは新苗

公箱

さうしは

あつちのきよさうしは

曾良

是らん留らん 第六 上よりこのいの
てとて所をうあうーさなりてふとぬさ
親いの詞を

也。以之爲是。其家之

そのつゝの羽をよみそへ

五

夕霞深處
冬文

けるよふところの如き一際おととて
やしやの文章をうかうとよめ

[illegible]

あつたやうにいつてむのちうんといふの

洞をくめりてふありとふの洞もそ
くくりてふありとふの洞もそ
をくくりてふありとふの洞もそ

三三

雲雀啼小田の古より 比喩を以て 翁

やま

源川集

山
うのうよ縫へききもふし
嵐蘭

[illegible]

やうの日

花 藤 馬 骨 の お お よ 笑 2 じ

杜 國

是よりまはるの骨とこ五まはるの骨と
もつとまはるの骨と
あまのりのをみる

飯 後 門 柱

さうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさう

時 机 簾

さうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさう

ひさし

此 南 土 の 門 中 へ 入 り し ま の 骨

珍 碩

さうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさう

藤 句 他 季 う け 王 の 骨

かきかきかきかきかきかきかきかきかき
史 邦

さうさうさうさうさうさうさうさうさう
元 兆

さうさうさうさうさうさうさうさうさう
去 来

さうさうさうさうさうさうさうさうさう
元 兆

又

源 川 集
洗 足 な 骨 へ 名 の つ け 骨 の 骨
酒 堂

綿錦なるぬきむの里 許六

鷓鴣階の端をつつひま 公羽

すくなくちしす持もきり 嵐蘭

月の色水ものより小軒裏 六

築地のまの典葉の駕 堂

相國寺あふ人のまのけりて 蘭

櫓の蓋も花のけりて 翁

かゝるの内頼のる形きめをきりて
お好みむとあふあふ一巻のりかき
あてて百負ふと世を伝ふむと

ふくしとるるるるるる

何とてなるも花をけりて 野水

花とちる此の酒念ふるも花を 翁

又

厚ゆきや白子若松 翁

千端よむむのさうの一鹿 回 珍碩

かゝるのさうの定むるある秋葉
うきうきする時いあるもそふめ
あつたまふまのさうの所よりかき
まふまふをむきりて
さうさうのさうのさうのさうのさうの

たづむゆふそくを白くけりてらん
あまも雨らうたりし時まきまき
ともまき秋の夕陽をまきまき
さうこそまきの心を得てまき

数へ彼岸 峯へ

なうのまきまき春秋二まきまき
まきまきまきまきまきまき

補又

夕まきのまきまき雷のまき

楚竹

まきまきまき山陰のまき

東睡

小男のまきまき神射のまき

公羽

飛あふほくあふなる月 越人

こほはかきまきまきのまき 荷子

又

新庄家伝

あふほくまきのまき 肥子

如柳

まきまきまき猪のまき

公羽

他まきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまき

二句一意の事

きの月

秋蟬のこらふ声きくまゝとて

野水

蘇乃實はふ常をうけり

重五

三

しとちりの帛をてはく世の中ふ

冬文

寧路二叔廣平永慶

越人

又

人々

顔世一旅人との交際を記す

去來

五ノナニシテ

山嵐雪

又

張加川系記

湯もよくある所

翁

教生石の下をふり

等窮

二白一毫をあるは明のちてあるは明
うく競向をさくるは俗をあらう所へ
そねくても所あり

補又

三

牛意をくはくはを越えしふ

詰和

山崎玄室

又

いんぎ

おとせのじも衣人農人へも

馬山

考ふ心も富の秋の戸

執筆

こころのゆるもさるる一巻のそとや

いづれの縣のい一巻のそとやふらふや
さうさうさうさうさうさうさうさう
一巻のそとやふらふやふらふやふらふや
一巻のそとやふらふやふらふやふらふや

於ものけの事

あうせ

うさうさうさうさうさうさうさう

越人

静はあよみれをさうし家

其角

又

あうの月

羽と敵へ首はさうさうさう 重五

小さうさうさうさうさうさう 翁

又

さうさう

みだのさうさうさうさうさう 翁

内苑頭さうさうさうさう 乙女

又

さうの月

巨く腐つてさうさうの妻へ 野水

元改る草の社もさうさうさう 翁

美の月

五

笑むけの葉もをけさ白くそ

越人

秋の夜は静かに
順

田藁

此よりけのる月日さうすのさうあるありある
 所々ともふさふさあるさうさうさうさう
 秋のさうさうさうさうさうさうさうさう
 秋のさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさう

補又

徐川集

類あそびをうて

曲翠

惡七玄清景清々秋洒堂

名所下名所を所系事

涼川集

海草、女を子に下屋へ置く。

酒堂

伏見の意を以相あそぶ

曲翠

てをいふなり 休えとわきまをいふなり

寧院法沙

世といふ舟の影の飛込山

許六

廣倉の温泉をひきえきり

李由

あゝと六郎井のさふふくで踊るゝとけへ

うこのろくろのろくろ地をぬき
附らうとす

凍川集

初より解務のあひの初て 翁

久めそそむく宮川乃上 嵐蘭

是は夢とらうりき國の名跡を跡うこ

補

賣りて菜

以て王不便や妹捨の月 翁

散る花は垣根を穿つ嵐霜 嵐雪

このい田園の名跡より田舎の地名を附

是事よりけりあもやいなりしる今より
こゝよりいそとて名をよめり
を附るるよりけりあもやいなりしる

え事しに附の事

の解るる

敵の力ありしむねの事 千里

晨明ふれきより鳥帽をえり 翁

又

凍川集

山依を切てかきくる関の前 翁

獲るる花はつめ世の中 酒堂

又
 多摩川のほとり
 水は清く流るる

重五
 荷兮

又
 山は高く
 谷は深く

九兆
 史邦

又
 何の由か
 越人

翁
 越人

大勢の中
 曲翠

曲翠

又
 翁

翁

又
 其角

其角

又
 其角

其角

こゝを月の本

ちのほ

松風よもろきぬちの酒の酔

羽
笠

賣のうたる書と水月

執華

又

卷之四

春の曉の風よ吹きよれ

野坡

馬場の常盤の松よきむ

山嵐
雪

是よりある月の古式にてある月には、
月をよめるもの、月といふものをかゝる
磯の如くをよめる月、小波をよめる月
あるといふ月の、縁のほろろある。

あゝと詞の月を
縮めはるきとあるに

出之於月

楊邑く月形

洞より月の裏の縁をたたくてあふはるる
 縁をつきて月といふ字の礎　　ゆく
 とく

33

礪
一
子
レ

又

三

世尊の要を以て破す

園風

萬洲移世て名月足程

猿
雖

古集よふくめてくこの名の月もあれと
古式をちりりきくをとり

補他のつぎのるゑの事様の事

稱はるは木のりかきのかうりせ 奉白

ほつた

火の仇を
一禮

三と頤合の狀の差を知る事

寒日之氣

ふりり一ふりりふりりふりりふりり 荷子

是を冬に於て得て一ふふとて
そふふとて

錢之尾集

花の酒を飲む

是を鏡の面と花の面より分ちて
て所を二花より分ちてと云ふといふが如く

五

總、八、五、八、月、三、號、庚、辰、路、通

是之類也。其意同。意。心。心。心。心。心。

卷之六

廿
鳩の縁鬼も多岐を以て月と花
翁

とてしるをみそ用紙を紙にひく

踏中へ海雲の雪の朝月夜 岱水

ふふふ
旅衣 笠より風あさうち拂ひ 羽笠

是れをわといふことと云ふは漢語を用い
たりは是れもふふふふふふふふ

ふふふ
糸様腹一すつりゆふきと 去来

ふふふ
こゝろふむやの様 吉野山 仙化

世二白の雪といふへと云ふは
ふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ

ふふふ他の中の花様ふの花と古人も
多く云ふことと云ふはふふふふ

補 あまの句の事

あまの
花の比喩候ふもふふ山 越人

田あまを答て照るに 翁

又

磐田と云ふ
常盤山を登るゆふ花候と 桐葉

ふふふのふふ連歌師の松 叩端

是文字の揚るなりあまのふふふふ

調出る毎の齡いふ日 調和

こころの調出る毎の年 智の巻のあけ
るなり

海山集

時々の不調かえりて花さかき 乙品

ふらふらふらふら 八重桜の水 沾圃

こころの春の哉 尚あそびを時いかんを
るに 花のちを 花のちを

連歌めを接は花を 花のちを 花のちを
むしとて 花のちを 花のちを
花のちを 花のちを 花のちを
花のちを 花のちを 花のちを

山手集

あふの心花あふらうとて 花のちを
花のちを 花のちを 花のちを
花のちを 花のちを 花のちを
花のちを 花のちを 花のちを

意句のま

花のちを 花のちを 花のちを 花のちを
花のちを 花のちを 花のちを 花のちを
花のちを 花のちを 花のちを 花のちを

縁さるふけの恨み 翁

又

大橋ふけのふけをぬき 半残

花を流し 紙のとて 土芳

うそまの千葉きんむろのそ
野坡

馬子出方日ハ内テ急スル翁

あゝ野
きぬくやあふかそくひてすふ
翁

風ひきたる
夢のうは
途越人

くろのひ

顏婦之病。梓里居。雨桐。

黒坂と多々良福切子 荷分

三つ子の魂

一の情二の乃乃情をいそぎしより
 何のいそぎありともいそぎこのうさうさ
 一のめを捨てるにゆふ女嬭なして出てもる
 倅ふりのいそぎをしむといそぎの乃乃
 いそぎをいそぎ

補句の事

何者の望まじき道の屎

是と云はと集のむと古人の集と
とも一覽のととさうとくかふ
とてふかふとてふとてふとてふ

古人の名はあはれなるかきしめたるは

早乙女の唐土のあはれなる後釋

口よりささる人の生の中

是はあはれなるかきしめたるは
集中はあはれなるかきしめたるは
ささる人なるかきしめたるは
釈子兄弟君臣の間あはれなるかきしめたるは
ささる人なるかきしめたるは

赤川集

掛とよき人のあはれなるかきしめたるは 公羽

かくいそんよき人のあはれなるかきしめたるは

かくいそんよき人のあはれなるかきしめたるは
ささる人なるかきしめたるは
ささる人なるかきしめたるは
ささる人なるかきしめたるは

行水の時面目をしりぬいそ

あはれなるかきしめたるは

ささる人なるかきしめたるは
ささる人なるかきしめたるは
ささる人なるかきしめたるは
ささる人なるかきしめたるは

一るたては国をもて町のあはれなるを
ふれはしむる一りあり

雨の音ははるふくち也

真一ふかき様の小使

うらうらとあるふく一様なるが借
ふくゆくのゆくふくはるるのゆく
ゆくのゆくふくはるるのゆく
古く日暮るる浅川を渡るうら
ふくはるるふくはるるのゆく
所へ

坊主の連は油で風ひく

こそ一るのやふ

さうらの

是の国の青やしてつるる
元兆

かたのゆくふくはるるのゆく
翁

白集

火のゆくふくはるるのゆく
去来

ほくはるるのゆくふくはるるのゆく
公卿

うらうらとあるふく一様なるが借
ふくゆくのゆくふくはるるのゆく
ゆくのゆくふくはるるのゆく

縣の諸路のあつち

是は

高の門にぬくふくはるるのゆく
曾良

かきつらるゝ夢ハ野中の地を堂 露丸

妻あゑとれを山犬の色 公羽

讀みかき栗

谷かきふおの扉をたゑる 其角

る故をそらするひるの偷り

顔あるく都の女のあらうを 敏子

韻塞

いふやうな意もあらへるに思ふれ 武水

花は色をかへて出る紫物 翁

晨明う畏れし夢の小方丈 訖六

秋の意

ひくまを此を捉えて思ふる 彫棠

中かきくをほも秋の心を 掃凡

ありぬもすくおの舞のききもの 公羽

其代

雲の外障をるるを思ふて 露沾

履きしを思ふるを思ふて 沾荷

八月を思ふるを武者一人 翁

壬の日

身をさし一ふの骨をほとせよ 荷分

竹煉乳をかりひりし 昌桂

雪の拂ふ鏡よ人若影うのま 雨桐

源川集

都をいふまの行跡よ思われ 利合

思ふより満ちる釋迦堂の暮 酒堂

笑ふそめを思ふ人候ゆふれと人若 弱

とちとち

花年と雪のまをいふま 支考

海馬の里をいふまをいふま 大草

雪ちいふまのまをいふま 翁

ちのち

世をいふまをいふま 源山寺 其角

乳人用まの骨をとりあて 我峯

ちやうふ其まをいふま 嵐雪

ちをいふ

渠かちと圓れまをいふ 其角

娘むめふくさるるあつちをね

嵐雪

ト系ふふの能きふきくを

其角

小文彦

佛のふ地を包むふきくを

翁

さうくく白挽出さるるきき

山店

おろろふきくあつちを

翁

小文彦

鳥さくさるる浦のふきくを

北枝

篠へくさるるくく月のふきくを

牧童

小撞をさるるてききくを

北枝

三つ葉

さるる泣美女さるるはくを

其角

かきくさるるを柳のふきくを

松濤

世の條と通世のふきくを

冬白

夏月記

さるるくくさるる眉のふきくを

杏雨

結縁のふきくを

杏農

あつちさるるあつちの時鳥

落梧

こゝにせしる

米部所へつてつゝ花子金

助史

き莖靴のひのぬれた如月

園女

まゝの草履つゝいふ花紙て

山人

うのち

秋のに旅の法連歌いとかきふ

翁

をいふやう時て留士えやも寺

荷子

寂とて株のきりのあはるる

杜國

あはれ

大妹

あはれ

あはれよりあはれつゝあはれ

其角

鈴繩ふむのさきんいひくわ

孤居

層のをささるゝあはれ

其角

あはれ

垣根のけしきあはれ

翁

あやめふれふ妹うたがひ

越人

あはれつゝあはれ

翁

あはれ

あはれつゝあはれ

枳風

あはれ

中

記

待宵の清き露もその中 翁
なりの蟬のもののうきの色 山化

無名集

清涼はまの露もあふかりをいそ 曾良
小袖をみるをいそ戒の師 不玉
ころのぬふ似るもあふそ 翁

後うらふ

祥寺ふ一日あふふ砂のうら 里圃
観の角のうらぬ貴穴 馬寛

濱山の牛は遠をそふ也 公純

あはま仙

人ひそかりそふのそふのれ 曾良
お柏を風のみとそふの 石雪
る紙射さそふ新猪の衣 公羽

あまの山あふ仙

国海ももそふの二日月 露九
ころ顔もあふかりそふのそ 重行
紙を小帳とけき 翁

ひんこ
いそがしき
のさかかめ
いそがしき

珍碩

現ふたうして月よりうき

秋の宮ものそうせふいり

路通

大津の巻

携るをふもそ琴の糸

松洞

うききくる女は馴て日をばり

奇香

矢負ふ腕のえたる意種

翁

いんの色

あはれは海濱のすきとまき

猿雖

雪の峰をにぎはる

雪芝

志あてては橋の影ふらふ

翁

宇陀法師

持ちては籠りて

李由

た遷の持ちては舟便

許六

朝の晩のふらふ

汶村

いふのり

里人ふらふはこと秋ある

越人

月たふはふ重石めく橋

羽立

こころひきくる木の根は花の軒とて 野水

顔寒

うしろ顔す白面も花の末かきおそ 岱水

けしきものうらふ花の卵とて 翁

まづ花と隠者の面をかりしを 許六

そと寒

花より花柄乃花より花とて 翁

こころねと花をあらわかんはに 露沾

花より花柄乃花より花とて 沾荷

そとのり

花より花柄乃花より花とて 翁

花より花柄乃花より花とて 越人

花より花柄乃花より花とて 荷分

あせ

花より花柄乃花より花とて 正秀

花より花柄乃花より花とて 珍碩

花より花柄乃花より花とて 正秀

たけし

つるみくろく行教の志

釣雪

盗人ふけとそく妹の恥を清く

翁

新丁のけしぬ園くの針

曾良

あつせ

木鐸ふゆう形し松の枝

長虹

秤にかねくくの奥

故及

世年ふたるとそくの銘もあき

一井

と旅而負

後任女きぬくうちく

其角

ふあう乳を吞む猿の声出

工齋

命を甲斐の掬ともえよ

枳風

たつ

下ろしたむしうをうの解

其角

とそくやぬ江の海をえぬして

溪石

とそくあつすけふはるの麻衣

琴風

顔寒

るうさぬきて世に笑をう

李由

しいさや堀の食屋アそむむ

木導

早秋の風 朱迪

蚤をゆいよ 秋 翁

をゆいよ 秋 翁

ゆいよ 秋 翁

血うれあ 月うれあ 翁

血うれあ 月うれあ 翁

血うれあ 月うれあ 翁

血うれあ 月うれあ 翁

血うれあ 月うれあ 翁

血うれあ 月うれあ 翁

血うれあ 月うれあ 翁

血うれあ 月うれあ 翁

血うれあ 月うれあ 翁

血うれあ 月うれあ 翁

血うれあ 月うれあ 翁

血うれあ 月うれあ 翁

血うれあ 月うれあ 翁

血うれあ 月うれあ 翁

月夜の静けさ

人々の心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

月夜の静けさ

人々の心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

静けさの心

手枕子男ゆりて結るゝと細 土芳

浮世の巻

鳥の巣とてはあゝと尾 翁

二月や春の甲ゆきとて 葉夕

あじよ光ふ春の明生 曾良

如須の巻

名ふのなうふ山々の岩依 翅輪

椿衣ふきぬる尼道の家 曾良

何の月も意ひふりてかきく 翠桃

赤心と死

高田の雪集るやむうと也 其角

白き雪と白の雪とぬれをぬ 嵐雪

きく ながき風の石夢ふれ 翁

新嶋の紙

空を待つるやせしむる秋 杉風

束を束としかきく秋の赤 濁子

鹿やうちを寝るの片唇の喰摘 涼葉

あゝと深き山の麓の寺
遊女はも人田舎やうい
ふあふさふさお君うさるもあつて

北枝
曾良
翁

あつてこゝろ山

鶺鴒の尾を松葉の国に掛らぬ
風を刃をささぐきつそ付た
華とて木の皮をさすたうめ

叩端
相葉
叩端

別を尋

山のかつある下市の里

子珊

その外のはらへる松の気むらじ
ゆり乃月もよこお影

杉風
桃隣

宿屋の指板

何のうさうさ形る縄の糞
おそ路しやいほの年のあ覚え
ふらうそしそ又あわらうあを

瓢界
立志
野童

さう秋葉

極おしをさるる田の中の小田
ほとよすおそあやあつて

喀山
路通

くろくろの思ひ深世 人 翁

後田之考伝

鳥羽玉の如切女夢ふふふ

叩端

急ちあふ破る葦の月

翁

秋を揺る味ふもの喰ひたり

桐葉

をい集伝

流く酒天むふりつす

公羽

とくくと枝の風のあふる音

野坡

稀盗人の縄ふてるふ

公羽

佐藤集

菊菊の色のをふも現るし

沾蓬

ぬあゆす浅い旅の数銭

曹良

つる秘のる供ふ今年寝癒の痕

翁

鹿島紀以

たふ鳥のふふおくわく在る馬

越人

瓦社ふみちるなる月

杉風

ふふを所ふ人をいふふ

苔翠

繭の仕上りの流り帯様
月夜もさくばきの秋の長ふ
杖一本を道の裾迄

西堂
詠竹
何中

とくふ山家

やもろとくふ山家の秋

翁

農家の志を隔て馬に駕

卓袋

露をさくより秋の痛さを

木節

ひるの里

拾ふの秋を戒律の尼

調和

羽衣の秋を戒律の尼
風をさくより秋の痛さを

立志
直方

山川集

あふ秋の人魚の秋を

翁

るをさくより秋の痛さを

大艸

秋の秋をさくより秋の痛さを

惟然

素秋の巻

秋の秋をさくより秋の痛さを

大艸

秋の秋をさくより秋の痛さを

路通

舞の中へおろそ早桶翁

こころを落して俗よくする所の
雅俗よくする所

縣向自他の事

硯をむくひきくれ捲け 自

秋の荒涼さうひさ夕少ふ 時節

新ふおねと終る女と群 他

けみ踊うとなり

むし火より流やかるらむ 他

秋風は流る水のりき来 其場

さうとて群のさうとて明色 自

いなり踊うなり

並ふの赤のそらくと流 時節

巡礼のふか抱き朝の月 他

飯新目ゆきよ無垢いきよ 他の向流

以てくくした赤のきのこ 他の巡礼の
あらい

そのく衣もきよの名残と 自あそ他の
むく

いさみの外踊うなり

其
場

食

他自方之也

白
白
白

自の心を
自の心を
自の心を
自の心を
自の心を
自の心を
自の心を
自の心を
自の心を
自の心を

他

他の向ひ

他の居るの

自他の居へ
西ひきよ

同

地自

地自

他
所
有
の
人

他の向ひ

他

他

他
あはれ
つきの
い

自他のあらし
むらゝし

中里

其場の
ありし

赤くすきし終のさ

補

此のふらうる双六の石

時

月うきくし入相の鐘

補

湯水の香よ曇る朝日しき

時節

雨の秋門田の輪紫結ふく

補

時をきく鳴て通るなり

天相

雲そくふ空六河ゆく風そ

時節補

青天よ有明月の影ほを

しきも人情なるをりなり

其場のありし野山海川あをい

そく場のありしいしと破机戸障

まてそく場はあふそりなりし

時節はあふ所のあふなりし

時節はあふ所のあふなりし

天相はあふ所のあふなりし

又人事あて自とも他とも

るあり階るあり自とも他とも

なりきなり

朝すれ持る持矢持る

うしはあもそちち

かく防る時ある由他のなりしなり

はるるかのなるからに

く、路るゝゝゝ、あるも自のふたゝゝ也、
是所るを、あるの自他を、

祖翁曰、藤るの、あ念め、

別、このの、

古人曰、藤るの、あるを、

是、このの、

鳥、醉曰、藤る、有用、

是、このの、

白、雄曰、美、中、の、

藤るの、意味、を、

俳諧寂琴卷之中終



